

小中学生の心身の健康状態に関する調査研究

——不登校意識との関連を中心に——

山 本 理 絵

I. 研究の目的

近年、子どもの自律神経や大脳前頭葉の機能の未発達、心身の健康状態、「子どものうつ」が問題になっていることを背景に、筆者は、2009年の第5回「愛知の子ども縦断調査」で、小学校3年生と5年生の子どもを対象に心身の健康度・生活の満足度、精神的安定に関する状態及び、それらの不登校意識等との関連を調査し、集計・分析した¹⁾。

その結果、3年生も5年生も、学校へ行きたくないと思うことが「いつもある」「ときどきある」子ども（「不登校意識群」）や父母に話を「聞いてもらえない群」は、心身の健康度・生活の満足度（QOL 尺度得点）が低く、集中できない、イライラする、だれかに怒りをぶつきたいと思うなど精神的安定に関する得点が低いことが認められた。

QOL 得点の下位領域である〈自尊感情〉得点については、3年生では、「不登校意識群」と「一般群」で有意差はみられなかったが、小5ではみられた。また、「聞いてもらえない群」の〈自尊感情〉得点は「聞いてもらえる群」の得点より、小3でも小5でも有意に低かった。

そして、「不登校意識群」に「聞いてもらえない群」の比率が高いこと、「不登校意識群」に「相談する人がいない」の比率が高いこと、「聞いてもらえない群」に「相談する人がいない」比率が高いことが確認された。

今回、第6回「愛知の子ども縦断調査」で小学校5年生から中学校1年生の子どもを対象に同様の質問紙調査を行った。小5と中1の回答結果を分析するとともに、第5回調査の小3と小5の回答結果と比較し、

小学校から中学校の子どもの心身の健康度・生活の満足度及び精神的安定の状態と不登校意識等の年齢的变化・特徴を明らかにすることを、本稿の目的とする。そのような特徴をつかむことによって、それらをふまえた子ども・子育て支援の方法を検討する一助とした。

II. 調査方法

1. 調査対象

本研究の分析対象とするのは、2011年に実施した第6回「愛知の子ども縦断調査」の子ども（小5と中1）の回答者である。第1回の調査は2001年に、愛知県内12カ所の保健センターの健康診査（1歳半児健診、3歳児健診）受診者及びフォローアップグループ参加者の親を対象に行った。2001年から5回にわたる調査の概要は、それぞれの調査を分析した論文を参照されたい²⁾。

第6回調査は、第5回調査回答者で子どもが当時3～5年生であった親565人のうち、継続調査協力に同意し郵送可能であった543人（小学校5年生253人、6年生23人、中学校1年生267人）に第6回調査用紙を送付した。うち4通は「宛名不明」で返送されたため、送付可能であったのは、539通であった。回答記入の上返送されたのは490通であり、回答率は91%であった。

母親対象の質問紙とともに子どもが回答する「子ども調査」の質問紙を同封し、親の了承と子ども本人の同意により調査用紙に記入してもらい、母親調査用紙と一緒に返送してもらった。子どもの回答は469通あった。調査時期は、2011年3月である。

2. 質問内容

① 24項目の「日本版 QOL 尺度」(表 4 参照)について、5 件法 (1 ぜんぜんなかった～5 いつもだった) で回答を得た。子どもの QOL 尺度には、4～7 歳版、8～12 歳版、13～16 歳版があり、本調査では 8～12 歳版を基本にした。対象年齢によってやや表現が異なる項目があるが、英語版、ドイツ語版を確認のうえ、「日本版 QOL 尺度」とほぼ同じ表現を用いた³⁾。なお、日本版 QOL を作成したメンバーである古荘と、原作者である Ravens らには、その使用許可をとってある。

② 精神的安定 (意欲・イライラ・攻撃性・集中力・睡眠) に関する 5 項目 (表 8 参照) について、5 件法 (1 ぜんぜんなかった～5 いつもだった) で回答を得た。うつ傾向に関連する項目で、①に含まれていない質問項目を設定した。

③ 今の学年になって、「学校に行きたくない」と思ったことについて、6 件法 (1 ぜんぜんない～6 いつもある) で回答を得た。

④ 父母が話をよく聞いてくれるかについて、6 件法 (1 ぜんぜんない～6 いつもある) で回答を得た。

⑤ 困ったことや悩み事を相談する人がいるかについて、2 件法 (いる、いない) で回答を得た。

3. 分析対象、集計・分析方法

本論文で分析対象とするのは、子ども調査用紙に有効な回答があった小学校 5 年生 216 人と中学校 1 年生 231 人の回答である。調査用紙に記入された回答を、すべて番号・記号で入力し、統計解析ソフトを用いて集計・分析した。質問内容①の QOL 尺度については、開発者の集計方法にならって、各項目の回答に 1 点から 5 点を与えて、全 24 項目の合計点及び下位尺度 (領域) ごとの合計点をそれぞれ 0～100 点に換算したも

のを、QOL 得点、各領域の得点とした。②の精神的安定に関する項目についても、各項目の回答に 1 点から 5 点を与えて、項目ごとの得点を算出した。①②とも、得点が高いほどよりよい状態であることを示している。

4. 倫理的配慮

前回調査の質問項目の最後に次回の調査への協力についても尋ね、了承して住所・氏名を記した人を継続調査対象者とした。調査依頼書に調査の趣旨及び個人情報保護に関すること、調査責任者等を表記し、親の了解と子どもの同意が得られた場合、子どもに質問紙に回答してもらうこととした。子どもの質問紙にも個人情報の保護、回答を拒否する自由について、わかりやすい説明を付した。回答した調査用紙を、親子別々に入れる内封筒も同封送付した。回答データは ID 番号によって管理し匿名化している。

III. 調査結果

1. 回答者数

回答があった子どもの数は、表 1 のとおりである。きょうだいがいる子どもは小 5 で 92.1 %、中 1 で 89.2 %、ひとり親家庭は、小 5 で 4.2 %、中 1 で 3.9 % であった。

表 1 回答者数 (%)

	男	女	合計
小 5	106 (49.1)	110 (50.9)	216 (100.0)
中 1	99 (42.9)	132 (57.1)	231 (100.0)
合計	205 (45.9)	242 (54.1)	447 (100.0)

2. 子どもの話を聞いてくれること

(1) 父母は話を聞いてくれるか

お父さんやお母さんが話を聞いてくれるかどうかで

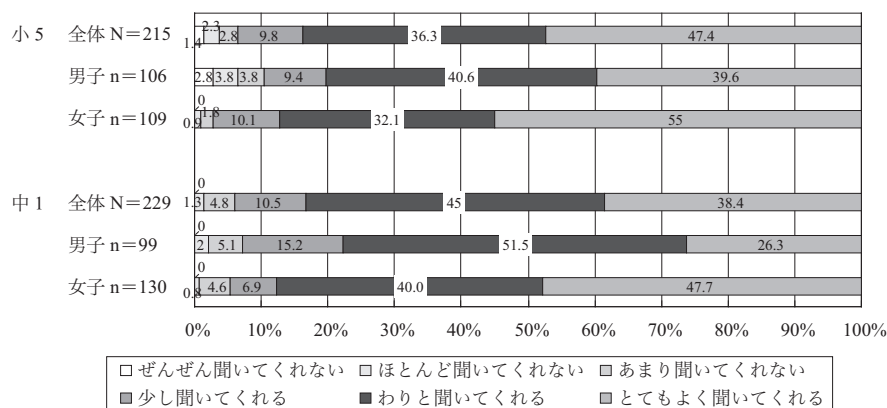


図 1 父母は話を聞いてくれるか

表2 困ったことや悩み事を相談する人の有無 (%)

		いる	いない	合計
小5	男子	92(86.8)	14(13.2)	106(100.0)
	女子	107(98.2)	2(1.8)	109(100.0)
	合計	199(92.6)	16(7.4)	215(100.0)
中1	男子	93(93.9)	6(6.1)	99(100.0)
	女子	121(91.7)	11(8.3)	132(100.0)
	合計	214(92.6)	17(7.4)	231(100.0)

表3 「聞いてもらえる」群別相談する人の有無 (%)

		いる	いない	合計
小5	聞いてもらえる群	176(95.7)	8(4.3)	184(100.0)
	聞いてもらえない群	22(73.3)	8(26.7)	30(100.0)
	合計	198(92.5)	16(7.5)	214(100.0)
中1	聞いてもらえる群	186(95.9)	8(4.1)	194(100.0)
	聞いてもらえない群	27(77.1)	8(22.9)	35(100.0)
	合計	213(93.0)	16(7.0)	229(100.0)

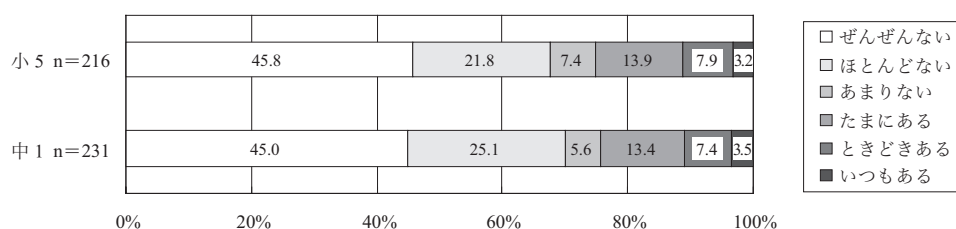


図2 学校に行きたくないと思ったこと

は、小5の83.7%、中1の83.4%が、「とてもよく聞いてくれる」、「わりと聞いてくれる」（これらを「聞いてもらえる群」とし、それ以外を「聞いてもらえない群」とする）と答えている（図1）。男女別では、小5、中1とも、女子の方が「とてもよく聞いてくれる」家庭が多い。中1では有意差が認められた ($\chi^2(1)=12.700$ $p<.05$)。「ぜんぜん聞いてくれない」、「ほとんど聞いてくれない」、「あまり聞いてくれない」を合わせても、小5で6.5%、中1で6.1%と少なかった。

(2) 相談する人の有無

「困ったことや悩み事を相談する人がいますか」の質問に対する回答は表2のとおりである。小5、中1ともに9割が「いる」と回答している。男女別では、小5で男子より女子の方が有意に「いる」が多かった（表2 小5 $\chi^2(1)=10.091$ $p<.01$ ）。

「父母に話を聞いてもらえる」かどうかとの関連をみると、「聞いてもらえない群」における「相談する人がいない」比率は、小5で27%、中1で23%と高かった（表3 小5 $\chi^2(1)=18.574$ $p<.001$ 、中2 $\chi^2(1)=16.012$ $p<.01$ ）。

3. 不登校意識

今の学年になって学校へ行きたくないと思ったことがある子どもは、「いつもある」と「ときどきある」を合わせると（「不登校意識群」とする）、小5で11.1%、中1で10.9%で、男女の差、学年の差はみら

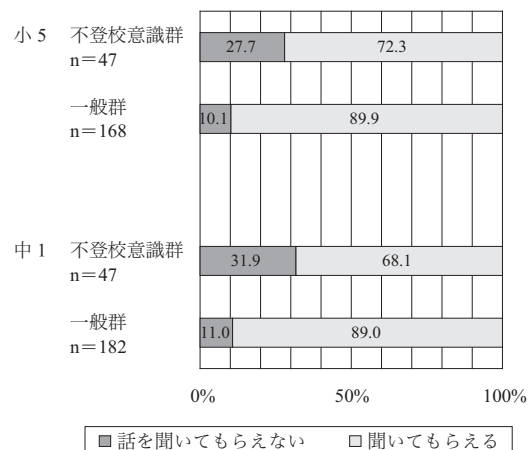


図3 「不登校意識」群と「話を聞いてもらえる」の関連

れなかった（図2）。

「不登校意識群」（それ以外を「一般群」とする）と、父母が話を聞いてくれるかどうかとの関連をみてみた（図3）。小5、中1ともに「不登校意識群」に「話を聞いてもらえない」群の比率が有意に高かった（小5 $\chi^2(1)=9.411$ $p<.01$ 、中1 $\chi^2(1)=12.633$ $p<.01$ ）。相談する人の有無との関連では、中1で「不登校意識群」に「相談する人がいない」の比率が「一般群」より有意に高かった。小5では同様の傾向がみられた（図4 小5 $\chi^2(1)=4.849$ $p<.10$ 、中1 $\chi^2(1)=16.135$ $p<.001$ ）。

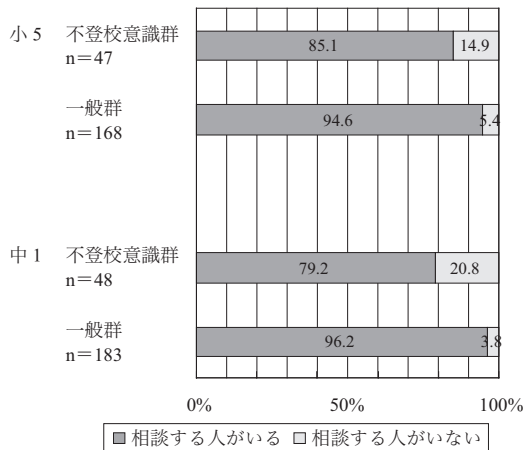


図4 「不登校意識」群別相談する人の有無

4. 心身の健康状態

(1) QOL 尺度による得点

子どもたちの心身の健康度・生活の満足度がどの程度か、QOL 尺度24項目について、それぞれ5段階で

評価してもらった。各項目5点満点での平均値を示したのが、表4である。得点が高いほど、健康状態がよいことを示している（★は否定的質問なので、点数を逆転させた）。

100点満点に換算した QOL 得点の分布は、図5、図6のとおりである。

学年別の QOL 得点と6領域ごとの平均得点は、表5、図7のとおりである。QOL 得点の平均値は、小5 75.6 (SD13.4)、中1 68.1 (SD12.7) で、どの領域の平均得点も小5より中1の得点の方が低く、「QOL 得点」と〈身体的健康〉、〈情緒的 Well-being〉、〈自尊感情〉、〈学校〉領域で有意差が認められた。また、小5、中1とも6領域のうち、〈自尊感情〉領域が最も平均値が低かった。男女別では、小5では、〈自尊感情〉領域で女子より男子の方が、〈家族〉領域で男子より女子の方が有意に高かった。中1では〈情緒〉領域で、男子より女子の方が有意に高かった（表6、表7、図8、図9）。

表4 QOL 尺度各項目の得点の平均値

		小5 n=216	中1 n=230	小5と中1の比較 t 値
身体的健康	★病気かなと思ったことがあった	4.6	4.6	0.328
	★頭が痛かったり、お腹が痛かったりした	4.3	4.1	1.807
	★疲れてぐったりしたことがあった	4.2	3.6	5.085 ***
	元気がいっぱいだった	4.1	3.4	6.302 ***
	平均点	4.3	3.9	5.411 ***
情緒的 Well-being	楽しかったし、たくさん笑った	4.4	4.1	3.312 **
	★たいくつだった（つまらなかった）	4.3	4.2	1.059
	★一人ぼっちのような気がした	4.6	4.7	-1.048
	★びくびくしていた（怖かった）	4.8	4.7	2.244 *
	平均点	4.5	4.4	2.017 *
自尊感情	自分はすばらしい（よくやった）と思った（自信があった）	2.9	2.5	3.418 **
	自分はなんでもできるような気がした	2.5	2.4	0.675
	自分に満足していた（自分が好きだ）	3.0	2.6	3.014 **
	いいことをたくさん思いついた	3.1	2.7	3.571 ***
	平均点	2.9	2.6	3.261 **
家族	親と仲良くしていた（うまくやっていた）	4.4	4.1	2.877 **
	家で気持ちよく過ごした	4.4	4.2	2.037 *
	★家で家族とけんかしていた	4.1	4.0	0.732
	★親にやりたいことをさせてもらえなかった	4.3	4.2	0.492
	平均点	4.3	4.1	1.946
友達	友達と一緒に遊んだ	4.4	4.3	0.391
	他の子どもたちに自分は好かれていると思った	3.6	4.1	-4.658 ***
	友達と楽しく過ごした（いっしょにいろいろなことをした）	4.6	4.4	2.118 *
	★他の子どもたちと自分は違っているような気がした	4.2	4.1	1.491
	平均点	4.2	4.2	-0.496
学校	学校の勉強はよくわかった（できた）	4.1	2.9	11.578 ***
	授業は楽しかった	3.7	2.8	7.459 ***
	★自分の将来について心配していた	4.2	3.7	4.603 ***
	★悪い点や悪い成績を取らないか心配していた	3.7	2.9	5.947 ***
	平均点	3.9	3.1	11.373 ***
★逆転項目		* p<.05, ** p<.01, *** p<.001		

小中学生の心身の健康状態に関する調査研究

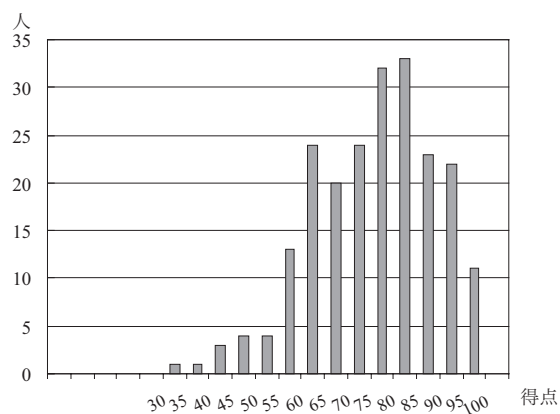


図5 QOL 得点の分布（小5）

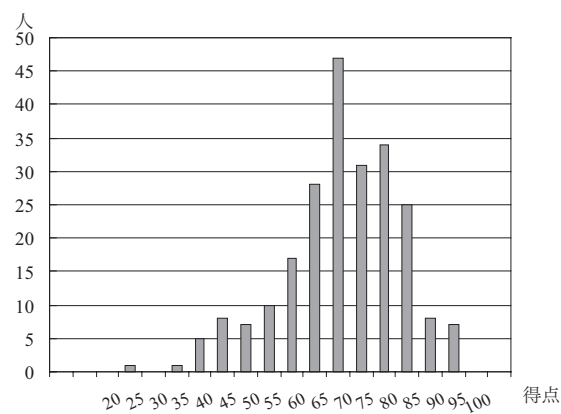


図6 QOL 得点の分布（中1）

表5 学年別 QOL 得点と 6 下位領域得点の平均値

		QOL 得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊感情	家族	友達	学校
小5	n=215	75.6	82.4	88.6	46.6	81.7	79.8	79.8
中1	n=230	68.1	73	85.7	38.8	78.4	80.7	80.7
t 検定	t 値	5.999 ***	5.411 ***	2.017 *	3.261 **	1.916 n.s.	-0.490 n.s.	-0.490 n.s.

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

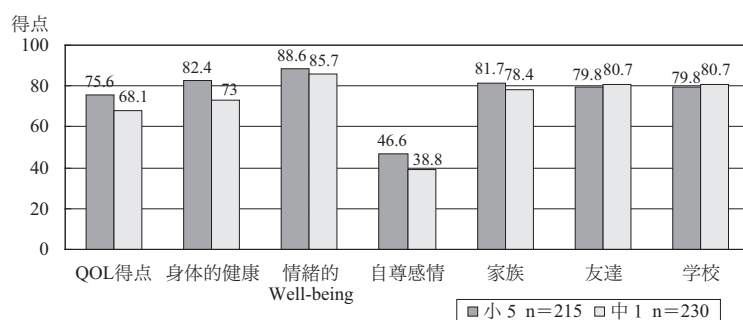


図7 学年別 QOL 得点と 6 下位領域得点の平均値

表6 小5の男女別 QOL 得点と 6 下位領域得点の平均値

		QOL 得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊感情	家族	友達	学校
男子	n=106	75.0	81.5	88.6	50.4	78.6	79.3	79.3
女子	n=108	76.1	83.3	88.7	43.0	84.8	80.3	80.3
t 検定	t 値	-0.606 n.s.	-0.782 n.s.	-0.059 n.s.	2.066 *	-2.627 **	-0.365 n.s.	-0.365 n.s.

* p<.05, ** p<.01

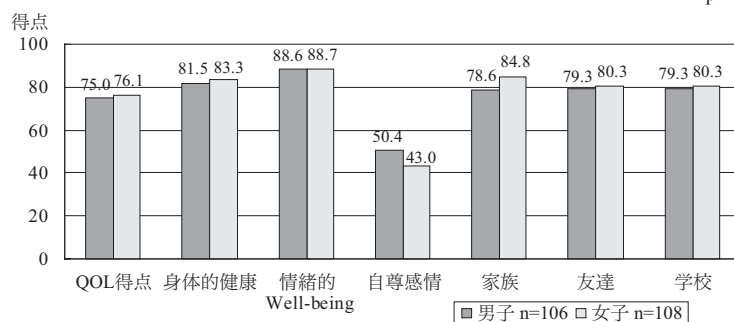


図8 小5の男女別 QOL 得点と 6 下位領域得点の平均値

表7 中1の男女別 QOL 得点と6下位領域得点の平均値

	QOL 得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊感情	家族	友達	学校
男子 n=99	66.8	71.2	82.7	40.1	75.8	78.8	78.8
女子 n=130	69.2	74.6	87.9	37.8	80.4	82.1	82.1
t 検定 t 値	-1.393 n.s.	-1.348 n.s.	-2.448 *	0.685 n.s.	-1.828 n.s.	-1.391 n.s.	-1.391 n.s.

* p<.05

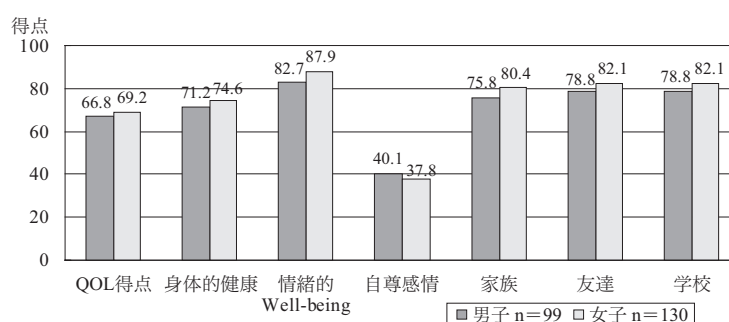


図9 中1の男女別 QOL 得点と6領域得点の平均値

表8 学年別精神的安定に関する得点の平均値

	小5		中1		小5と中1の比較 t 値
	n	平均値	n	平均値	
★何もやる気がしないこと	216	4.2	230	3.7	4.817 ***
★イライラすること	216	3.9	230	3.5	3.724 ***
★だれかに怒りをぶつけたいと思ったこと	216	4.1	230	3.9	1.392 n.s.
★何かに集中できないこと	215	4.1	230	3.6	4.679 ***
よく眠れた	216	4.2	229	4.0	2.021 *
平均点	215	4.1	227	3.7	4.545 ***

★逆転項目

* p<.05, *** p<.001

(2) 精神的安定に関する得点

QOL 項目以外に、イライラや集中力等の精神的安定に関する5項目について、同様に5段階評価してもらった。各項目ごとの得点の平均値は表8のようである。1項目1～5点で得点が高いほど、健康状態がよいことを示している(★は否定的質問なので、点数を逆転させた)。「何もやる気がしないこと」「イライラすること」「何かに集中できないこと」「よく眠れた」

で小5より中1の方が、得点が有意に低くなっている。

5. QOL 得点に与える「不登校意識」と「聞いてもらえる」の2要因の影響

QOL 得点に対する「不登校意識」と「聞いてもらえる」の2要因の影響を分析するために、二元配置の分散分析をした。その結果、小5、中1とも、交互作用に有意差はみられず、2要因とも主効果が0.1%水準で有意であった(表9、図10、図11)。次に、それ

表9 QOL 得点に対する「不登校意識」、「聞いてもらえる」の2要因の分散分析結果

学年	不登校意識	聞いてもらえる	交互作用
小5	F(1,234)=17.185 ***	F(1,234)=25.877 ***	F(1,234)=0.275 n.s.
中1	F(1,256)=23.062 ***	F(1,256)=22.349 ***	F(1,256)=0.788 n.s.

*** p<.001

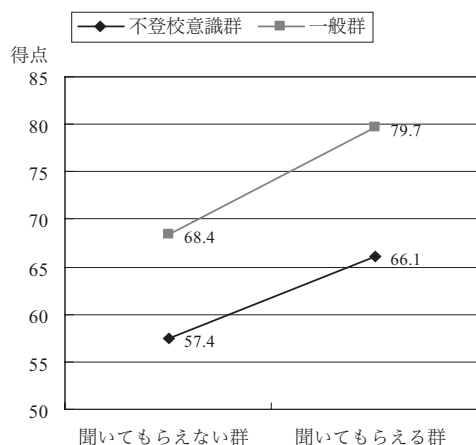


図10 2要因の分散分析結果（小5）

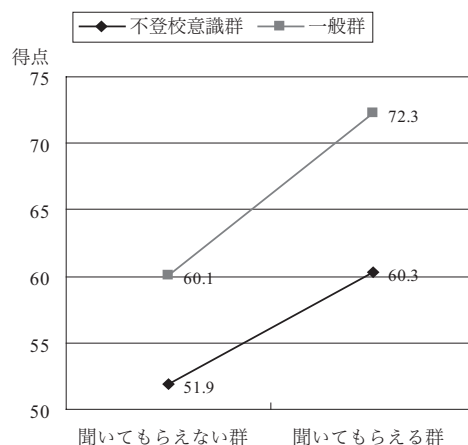


図11 2要因の分散分析結果（中1）

それぞれの要因ごとに QOL 尺度による下位領域ごとの得点の差をみることにする。

6. 不登校意識群の心身の健康状態

(1) 不登校意識群の QOL 尺度による得点

「不登校意識群」「一般群」の2群は、心身の健康度・生活の満足度（QOL 尺度）の観点からみると、どのような違いがあるのか、その得点を比較してみた。

表10、表11、図12、図13のように、小5では、QOL 得点及びすべての下位領域で、中1では〈自尊

感情〉領域を除く全ての下位領域で、「不登校意識群」の得点の平均値は、「一般群」よりも有意に低かった。中1の〈自尊感情〉領域の得点は32.1と低くなっているが、一般群と比べると有意な差はみられなかった。

さらに、「不登校意識」の各段階ごとの QOL 得点の平均値を集計してみた。表12のように、学校へ行きたくないと思ったことが「ぜんぜんない」子どもの QOL 得点は小5で83点、中1で75点と高くなっている。

表10 「不登校意識」別 QOL 得点と6下位領域得点の平均値（小5）

	QOL 得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊感情	家族	友達	学校
不登校意識群 n=169	65.3	73.1	77.0	34.8	73.9	67.6	67.6
一般群 n=47	78.4	85.0	91.8	49.9	83.9	83.1	83.1
t 検定 t 値	-6.378 ***	-4.344 ***	-5.034 ***	-3.545 ***	-3.544 ***	-3.928 ***	-3.928 ***

*** p<.001

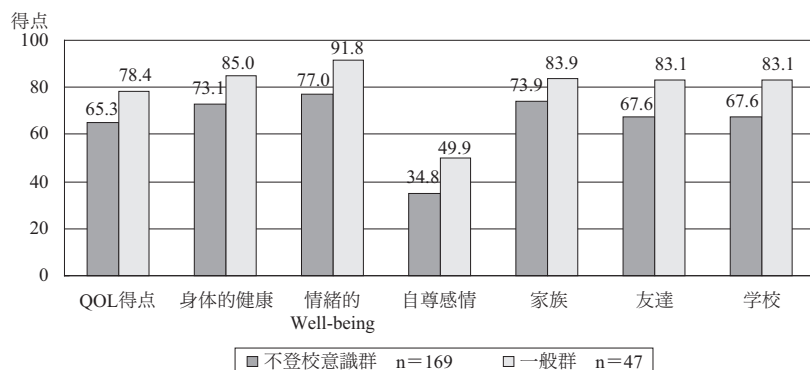


図12 「不登校意識」別 QOL 得点と6下位領域得点の平均値（小5）

表11 「不登校意識」別 QOL 得点と 6 下位領域得点の平均値 (中 1)

	QOL 得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊感情	家族	友達	学校
不登校意識群 n=181	57.5	58.5	73.0	32.1	68.8	69.9	69.9
一般群 n=48	71.0	77.0	89.0	40.6	80.9	83.5	83.5
t 検定 t 値	-6.515 ***	-6.581 ***	-5.385 ***	-1.893 n.s.	-3.485 **	-4.892 ***	-4.892 ***

** p<.01, *** p<.001

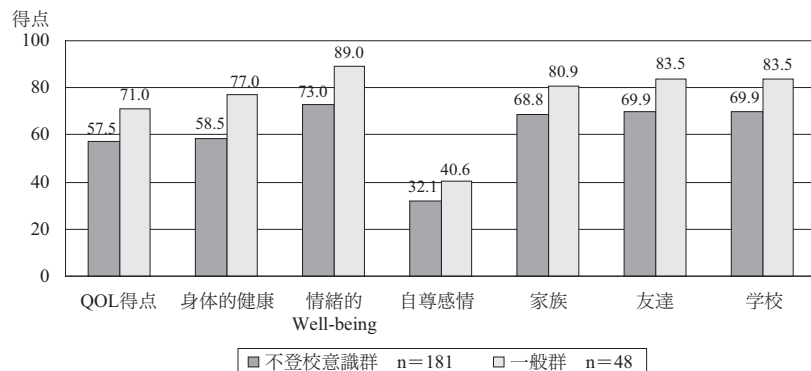


図13 「不登校意識」別 QOL 得点と 6 下位領域得点の平均値 (中 1)

表12 「不登校意識」(6段階)別 QOL 得点の平均値

学校へ行きたくないと 思ったこと	小 5		中 1	
	n	平均値	n	平均値
ぜんぜんない	99	82.9	102	74.5
ほとんどない	47	75.0	58	69.5
あまりない	16	67.9	13	59.2
たまにある	29	64.1	31	58.4
ときどきある	17	67.3	17	55.9
いつもある	7	61.9	8	55.2
合計	215	75.6	229	68.1

(2) 不登校意識群の精神的安定

「不登校意識群」の精神状態をみるために、精神的安定に関する得点を「一般群」と比較してみた。表13、表14のとおり、小5、中1とも、すべての項目で、「不登校意識群」は「一般群」より得点が有意に低かった。

7. 「話を聞いてもらえるかどうか」と心身の健康状態との関連

(1) 「聞いてもらえる」と QOL 尺度による得点との関連
子どもが「父母に話を聞いてもらえるかどうか」と QOL 尺度による得点との関連をみたのが表15、表16、図14、図15である。小5では〈身体的健康〉領域以

外で、中1では、QOL 得点及びすべての領域得点において、「聞いてもらえる群」の方が、「聞いてもらえない群」より得点の平均値が有意に高かった。

(2) 「聞いてもらえる」と精神的安定の関連

精神的安定に関する項目の得点を、話を「聞いてもらえる群」と「聞いてもらえない群」で比較したのが表17、表18である。小5ではすべての項目で、中1では「だれかに怒りをぶつきたいと思ったこと」「何かに集中できないこと」以外は、「聞いてもらえる群」の方が「聞いてもらえない群」より有意に得点が高い。

表13 「不登校意識群」の精神的安定に関する得点の平均値（小5）

	不登校意識群		一般群		t 検定
	n	平均値	n	平均値	t 値
★何もやる気がしないこと	47	3.4	169	4.5	-5.607 ***
★イライラすること	47	2.9	169	4.1	-7.165 ***
★だれかに怒りをぶつきたいと思ったこと	47	3.1	169	4.3	-5.831 ***
★何かに集中できないこと	46	3.4	169	4.3	-4.857 ***
よく眠れた	47	3.7	169	4.3	-2.776 *
平均点	46	3.4	169	4.3	-8.281 ***
★逆転項目	* p<.05, *** p<.001				

表14 「不登校意識群」の精神的安定に関する得点の平均値（中1）

	不登校意識群		一般群		t 検定
	n	平均値	n	平均値	t 値
★何もやる気がしないこと	48	2.9	182	3.9	-6.075 ***
★イライラすること	48	2.8	182	3.6	-4.441 ***
★だれかに怒りをぶつきたいと思ったこと	48	3.1	181	4.1	-4.889 ***
★何かに集中できないこと	48	2.9	182	3.8	-4.903 ***
よく眠れた	48	3.5	181	4.1	-2.337 *
平均点	48	3.0	179	3.9	-6.798 ***
★逆転項目	* p<.05, *** p<.001				

表15 「聞いてもらえる」群別 QOL 得点と6下位領域得点の平均値（小5）

		QOL 得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊感情	家族	友達	学校
聞いてもらえる群	n=184	77.7	83.5	90.4	48.7	85.1	82.1	82.1
聞いてもらえない群	n=30	62.3	75.8	77.3	32.5	61.0	65.5	65.5
t 検定	t 値	-6.295 ***	-1.900 n.s.	-3.443 **	-3.213 **	-7.876 ***	-3.543 **	-3.543 **

** p<.01, *** p<.001

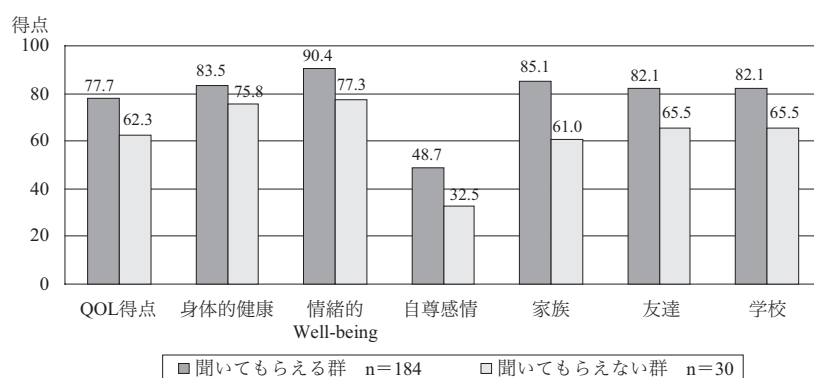


図14 「聞いてもらえる」群別 QOL 得点と6下位領域得点の平均値（小5）

表16 「聞いてもらえる」群別 QOL 得点と6領域得点の平均値(中1)

		QOL 得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊感情	家族	友達	学校
聞いてもらえる群	n=193	70.3	75.2	87.9	40.2	81.3	83.0	83.0
聞いてもらえない群	n=35	56.7	61.3	73.9	30.1	63.9	69.1	69.1
t 検定	t 値	−6.296 ***	−4.079 ***	−3.569 **	−2.303 *	−4.251 ***	−4.374 ***	−4.374 ***
* p<.05, ** p<.01, *** p<.001								

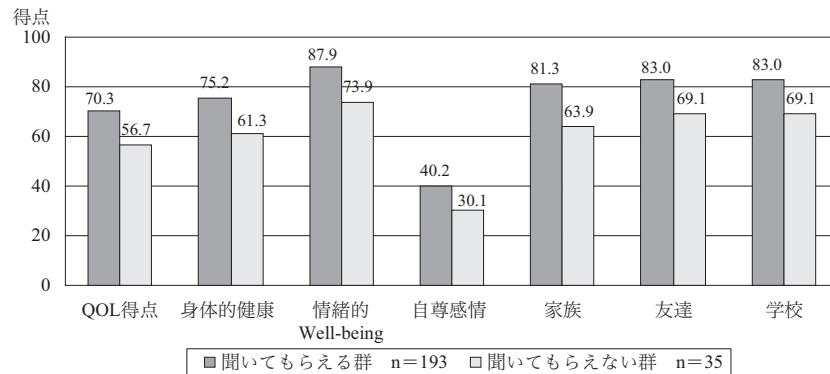


図15 「聞いてもらえる」群別 QOL 得点と6下位領域得点の平均値(中1)

表17 「聞いてもらえる」群別精神的安定に関する得点の平均値(小5)

	聞いてもらえない群		聞いてもらえる群		t 検定
	n	平均値	n	平均値	t 値
★何もやる気がしないこと	30	3.4	185	4.4	-4.162 ***
★イライラすること	30	2.9	185	4.0	-5.399 ***
★だれかに怒りをぶつけないと思ったこと	30	3.0	185	4.2	-4.213 ***
★何かに集中できないこと	30	3.1	184	4.2	-5.790 ***
よく眠れた	30	3.5	185	4.3	-2.763 **
平均点	30	3.2	184	4.2	-7.446 ***
★逆転項目					** p<.01, *** p<.001

表18 「聞いてもらえる」群別精神的安定に関する得点の平均値(中1)

	聞いてもらえない群		聞いてもらえる群		t 検定
	n	平均値	n	平均値	t 値
★何もやる気がしないこと	35	3.3	193	3.8	-2.628 **
★イライラすること	35	3.1	193	3.5	-2.033 *
★だれかに怒りをぶつけないと思ったこと	35	3.5	192	4.0	-1.960 n.s.
★何かに集中できないこと	35	3.4	193	3.6	-1.234 n.s.
よく眠れた	35	3.5	192	4.0	-2.617 **
平均点	35	3.3	190	3.8	-2.979 **
★逆転項目					* p<.05, ** p<.01

IV. 考察と課題

1. 父母に話を聞いてもらえるか

お父さんやお母さんが話を「とてもよく聞いてくれる」、「わりと聞いてくれる」と答えた子どもは（「聞いてもらえる群」）は小5、中1とも85%前後あった。2009年調査では3年生で83.2%、5年生で81.3%であったので、あまり変わらない。「ぜんぜん聞いてくれない」、「ほとんど聞いてくれない」、「あまり聞いてくれない」を合わせても、小5で6.5%、中1で6.1%で、これも、2009年調査の小3で6.3%、小5で6.9%とあまり変わらない。

「困ったことや悩み事を相談する人がいますか」は小5、中1ともに9割が「いる」と回答しており、小5では男子より女子の方が「いる」比率が有意に高かった。2009年調査では、男女の差はみられなかったが、小3、小5の「いる」の割合は、9割と今回とほぼ同じくらいであった。

「父母に話を聞いてもらえる」かどうかとの関連をみると、小5、中2とも「聞いてもらえない群」に「相談する人がいない」比率が有意に高かった（小5で27%、中1で23%）。2009年調査では、小3では有意差がみられ、小5では有意差がみられなかったが、どちらの学年も「聞いてもらえない群」の23%が「相談する人がいない」と回答していた。小学生も中学生も、父母に話を聞いてもらえないと感じている子どもは、相談する人もいない傾向にあると考えられる。

2. 学校へ行きたくないと思ったこと

この学年になって学校へ行きたくないと思ったことがある子どもは、「いつもある」と「ときどきある」を合わせると（「不登校意識群」）、小5、中1とも1割強で、男女の差、学年の差はみられなかった。なお、2009年調査では、小3で13.8%、小5で12.5%であった。

中1、小5とも「不登校意識群」には、「聞いてもらえない群」の比率が30%前後あり、有意に高かった。2009年調査では、小5では「不登校意識群」には、「聞いてもらえない群」の比率が有意に高く、小3では有意な関連がみられなかった。また、相談する人の有無との関連では、中1、小5では「不登校意識群」に「相談する人がいない」の比率が15~20%ほどあり、中1では「一般群」より有意に高く、小5では高い傾向がみられた。2009年調査では、小5で有意差がみられた。小学校高学年くらいから、父母に

「話を聞いてもらえない」ことと、「相談する人がいない」ことが、「不登校意識群」と関連してくると思われる。

3. 子どもの心身の健康度・生活の満足度、精神的安定の状態

QOLの合計得点と6領域ごとの平均得点は、どの領域も小5より中1の得点の方が低く、「QOL得点」と〈身体的健康〉、〈情緒的 Well-being〉、〈自尊感情〉、〈学校〉領域で有意な差がみられた。QOL得点の平均値は、小5で75.6、中1で68.1、2009年調査においては、小3で76.9、小5で73.2で、小3、小5、中1と学年が上がるにしたがって、得点が下がってきている。男女別では、今回調査においても、2009年調査でも、小5では、〈家族〉領域で男子より女子の方が有意に高かった。

〈自尊感情〉と〈学校〉の領域で小3より小5の得点がありに低くなっていたが、中1になるとそれに加えて〈身体的健康〉、〈情緒的 Well-being〉の領域（〈家族〉と〈友達〉以外の領域）で得点が下がってきている。とくに〈自尊感情〉は3年生より5年生、5年生より中学校1年生の方が低くなっていることは特徴的である。

また、精神的安定に関する項目でも、3年生より5年生、5年生より中学校1年生の得点の方が低くなっていた。なお、2009年調査の小5の点数と今回調査の小5の点数は、ほぼ同じであった。

4. 「不登校意識」、「父母に話を聞いてもらえる」とQOL得点との関連

QOL得点に対する「不登校意識」と「聞いてもらえる」の二元配置の分散分析の結果、小5、中1とも、有意な交互作用はみられず、2要因とも主効果が0.1%水準で有意であった。不登校意識をもっている子どもの方がそうでない子どもより心身の健康度・生活の満足度は低く、父母に聞いてもらえていないと思っている子どもの方がそうでない子どもより心身の健康度・生活の満足度は低いといえる。2009年調査の小3、小5においても、同様の関連がみられた。

「不登校意識」とQOL尺度の下位領域得点との関連では、小5ではすべての領域において、中1では〈自尊感情〉領域を除く全ての領域において、得点の平均値が、「不登校意識群」は「一般群」に比べて有意に低かった。2009年調査の小5においても、すべての領域得点において、「不登校意識群」は「一般群」に比べて有意に低かった。小3では、〈自尊感情〉領

域を除く全ての領域得点において、「不登校意識群」は「一般群」に比べて有意に低かった。中1では、一般群の〈自尊感情〉得点が下がってきているので、「不登校意識群」と「一般群」との差が縮まっているのではないかと考えられる。

父母に話を聞いてもらえるかどうかとQOL尺度の下位領域との関連については、小5では〈身体的健康〉領域以外で、中1ではすべての領域において、「聞いてもらえる群」の方が、「聞いてもらえない群」より得点の平均値が有意に高かった。2009年調査では、3年生では〈身体的健康〉領域以外で、5年生では、すべての領域得点において、「聞いてもらえる群」の方が、「聞いてもらえない群」より得点の平均値が有意に高かった。学年グループによって、多少の違いはあるが、概ねすべての領域において、話を聞いてもらえている子どもの心身の健康度・生活の満足度は高いといえる。

5. 「不登校意識」、「父母に話を聞いてもらえる」と精神的安定得点との関連

小5、中1とも、精神的安定に関するすべての項目で、「不登校意識群」は「一般群」より得点がありに低かった。2009年調査でも、精神的安定に関する5項目の平均点は、小3においても小5においても「不登校意識群」は「一般群」より得点がありに低かった。3年生では「何もやる気がしない」以外の項目において、5年生では、「よく眠れた」以外の項目で、「不登校意識群」は「一般群」より得点がありに低かったという違いはあるが、小学生も中学生も、学校へ行きたくないと思うことが「いつもある」「ときどきある」子どもの中には、集中できない、イライラする、だれかに怒りをぶつきたいと思うなど精神的状態がよくない子どもが多いと考えられる。

精神的安定に関する項目と「聞いてもらえる」との関連については、小5ではすべての項目で、中1では「だれかに怒りをぶつきたいと思ったこと」「何かに集中できないこと」以外は、「聞いてもらえる群」の方が「聞いてもらえない群」より有意に得点が高かった。2009年調査では、小3、小5ともに、「よく眠れた」以外は、「聞いてもらえる群」の方が「聞いてもらえない群」より有意に得点が高く、精神的安定に関する5項目の平均点は、小3においても小5においても「聞いてもらえない群」は「一般群」より有意に低かった。どの学年でも、話を聞いてもらえる子どもたちは、総じて精神的にも安定しているといえる。

6. まとめと課題

学校へ行きたくないと思ったことが「いつもある」「ときどきある」という「不登校意識」の強い小学生と中学生の心身の健康度・生活の満足度は、平均すると低く、精神的安定の状態はよくないことが示された。〈自尊感情〉は、小3—小5—中1と、学年全体で下がってきているなかで、「不登校意識」の強い子どもにとっては、とくに5年生で、他の子どもたちとの自尊感情得点の差が目立ってみられた。子どもの学年の違いによる自尊感情への影響要因の違いをさらに検討していく必要があると思われる。一方で、どの学年においても、子どもにとって自分の気持ちを聞いてもらえるような人がいることが、子どもの心身の健康上重要なことであると考えられる。子ども・子育て支援においても、そのような関係を家庭、学校、地域でつくっていくことに留意して、支援策や援助方法を検討していく必要があるだろう。

今後、本調査結果の特徴をふまえ、母親調査の回答と対応させながら、母親の子どもの特徴に対する認知（発達障害の傾向など）や子育ての不安、養育態度等と、子ども自身が感じている心身の健康状態との関連を学年別に検討していく予定である。これらの関連を明らかにすることによって、子どもや親・学校への支援方法の検討に寄与することができよう。発達障害を抱える子どもの友達関係の難しさや自尊感情・自己肯定感の低さも指摘されているが、このような問題も視野に入れた支援のあり方を追究していきたい。

付記 本研究は、科学研究費補助金による研究（基盤研究(C)、2010年度～2013年度、課題番号22500701）「育児困難な親子への支援に関する思春期までの縦断的研究：経済格差・発達障害を中心に」（代表：神田直子）による研究の一部である。

注

- 1) 山本理絵「小学生の心身の健康状態に関する調査研究—不登校意識との関連を中心に—」愛知県立大学大学院人間発達学研究科『人間発達学研究』第1号 2010年 pp. 37-52
- 2) 神田直子・山本理絵「子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方」『愛知県立大学 児童教育学論集』第35号 2001年 pp. 21-42、山本理絵・神田直子「子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方(2)—『育児不安』と性別役割分業・母親役割意識の関連を中心に—」『愛知県立大学 児童教育学論集』第36号 2003年 pp.

39-54、山本理絵・神田直子「子どもの『育てにくさ』と育児不安・マルトリートメント(2)―4歳児と6歳児を中心に―」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第53号 2005年 pp. 33-56、神田直子・山本理絵「幼児期から学童期への移行期における親の子育て状況と不安、支援ニーズ―『第4回愛知の子ども縦断調査』結果報告第1報―」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第56号 2007年 pp. 17-34、神田直子・山本理絵「小学生をもつ親の子育て状況・不安と子どもの特性―『第5回愛知の子ども縦断調査』結果第1報―」『愛知県立大学教育福祉学部論集』2010年 参照。

3) ドイツのRavensとBullingerらは、子どものQOL(Quality of Life)を「子どもの主観的な心身両面からの健康度・生活全体の満足度」と定義し、それをチェックするQOL尺度―Kid-KINDL^Rを開発した。これを古庄らは日本語訳し「日本版QOL尺度」を作成し、活用している。この尺度は、日常生活面である家庭と学校における心身の健康と適応状態を考慮に入れた包括的かつ簡便な尺度であり、その信頼性・妥当性が確認されている。

Ravens-Sieberer U. (2003). Der Kindl-R Fragebogen zur Erfassung der gesundheitsbezogenen Lebensqualität bei Kindern und Jugendlichen – Revidierte Form. In: Schumacher J, Klaiberg A, & Brähler E (Hrsg.), Diagnostische Verfahren zu Lebensqualität und Wohlbefinden. Göttingen: Hogrefe, S. 184-188、柴田玲子・根元芳子・松嶋くみ子他「子どものQOL尺度質問用紙(小学生版・中学生版・親用)」厚生労働科学研究(子どもの家庭総合研究事業)『「健やか親子21推進のための学校における思春期の心の問題に関する相談システムモデルの構築」総合研究報告書』2005年 pp. 26-45、古荘純一「学童期の子どもの現況: QOL尺度調査からの考察」『小児の精神と神経』47(4) 2007年 pp. 233-243、松嶋くみ子他「日本におけるKid-KINDLR Questionnaire(小学生版QOL尺度)の検討」『日本小児科学会雑誌』107巻11号 2003年 pp. 1514-1520、松嶋くみ子他「日本における『中学生版QOL尺度』の検討」『日本小児科学会雑誌』111巻11号 2007年 pp. 1404-1410 参照。